

〈研究ノート〉

ブラジルの韓国移民社会に関する実態報告

田所清克／大浦智子

キーワード

韓国系コミュニティー, 朝鮮戦争 (動乱), 初期日本人移民と戦後の韓国移民の違い, 韓国系企業, 異文化, ボン・ヘチーロ (韓国系の集住地域)

Resumo

Nós dois informadores temos propulsado até agora a investigação e o estudo sobre os imigrantes como árabes, judeus, polacos, lituanos, inclusive japoneses, como uma parte do estudo integral e global sobre os grupos étnicos no Brasil.

Em consequência disso, pudemos apresentar publicamente uma parte do conhecimento e do resultado desse estudo.

Será necessário dizer que este relatório, referente à sociedade ou comunidade coreana que realizamos a investigação durante dois anos, constitui uma parte do estudo acima-mencionado.

Neste relatório[Ponto de situação referente à imigração coreana no Brasil] tentamos sobressair a diferença da situação, as características culturais, o modo de pensar e agir entre os imigrantes japoneses e coreanos no Brasil. Considerando estes dois grupos étnicos diferentes, poderíamos entrever uma miniatura de ambos os países atuais, quer dizer, o Japão e a Coreia do Sul.

実態調査の目的

1908年に始まるブラジルへの日本移民に較べれば、韓国移民のこの国における歴史はそう古くない。戦前に日本移民としてブラジルに渡航した者を例外として、50人からなる最初の韓国移民がリオのガレオン空港に降り立ったのは、朝鮮動乱が終息した数年後の1956年になってからのことである。

主として元兵士で構成された彼らが戦後、一端、戦争亡命者としてニューデリーに居を定め、2年後にブラジル移住を決意したことは、特筆すべきである。そうした韓国移民の多くは技術者で、サンパウロ市内に住みつくことになる。

韓国移民の第二弾は釜山出身の人たちで、17家族91名が1963年、主として農業に従事する目的でサントス港に着いた。翌年の1964年は、大挙として移民の流入が見られた年でもある。つまり、さまざまな年齢層の246名がエスピーリト・サント州に到来する傍ら、250余りがリオ・デ・ジャネイロ州にも赴いた。韓国移民の流入先は、南東部に限ったことではない。1966年になると、

450名余りが、オランダ系移民が集住するパラナー州に農業移民として足を踏み入れる。

1956年から1977年の間、韓国からは6,422人が合法的にブラジルに入国している一方で、少なからぬ数の不法入国が推定されている。そうした不法入国者の大半は、パラグアイとの国境からのようだ。

約5万からなるブラジルの韓国人および韓国系コミュニティー。彼らの8割はサンパウロに居住する。以下の報告のように、「東洋街」に日本人や中国人とともに混住し、主として商業に従事している。興味深いのは、ブラジルに到来以前の彼らの多くが、特定の宗教を信仰せず、カトリックやプロテスタント、仏教などに帰依するようになったのは、その後のことである。

報告者はこれまで、「ブラジルにおける民族集団に関する研究」の一環として、アフロ系や日本移民も含めて、ユダヤ系、ポーランド系、リトアニア系移民についての実態調査なり研究を推進してきた。と同時に、その過程で得られた知見および成果の一端を公にしてきている。ブラジルの韓国移民社会に関する実態報告はいわば、上記の包括的研究の一翼を担うものである。移民の歴史も背景も異なる日本移民と韓国移民。彼らが身をおくブラジルのそれぞれのコミュニティーの実態を探ることによって、双方の民族集団の有り様や個々の民族集団の文化的特質などがより鮮明なかたちで浮き彫りにされるかもしれない。

## 調査に当たって

ブラジルの韓国移民の状況を知る手がかりとして、サンパウロ市内にある韓国移民に縁の深い地域を訪ねた他、まず初めに1964年に創設されたサンパウロ市内にあるブラジル韓国協会を訪ね、同協会の事務局長リー・アンドレさんに話をうかがった。協会内には韓国移民の歩みをたどる写真が展示され、大韓航空の航路が記された古い世界地図が壁に貼られていたのが印象的だった。1963年に公式の韓国移民は始まり、船での移民よりも飛行機での移住者が多いという新しい時代の移民像を象徴するかのような地図だった。

リーさんによると、韓国移民史を詳述した本（ポルトガル語と韓国語で表記）の発行が近く予定されているということで、現在は編纂中のため、2008年に発行されたブラジル韓国移民45周年の記念小冊子をいただいた。ブラジルの韓国移民史はこの小冊子を一つの手がかりとしてまとめたものである。また、知己を得てブラジルに移住されて27年になる韓国人の会社経営者の方の協力で、2009年に発行されたブラジルと韓国の外交樹立50周年の記念誌をお借りし、ブラジルの各方面に影響を及ぼす韓国の存在をまとめる手がかりとさせていただいた。

約50年の韓国移民史は決して一言でまとめられるものではなく、当初の移民には日本語を話す世代の韓国人も少なくなかった。日本移民と共にブラジルまで渡航するケースもあったようだ。戦前にまでさかのぼると日本移民としてブラジルに移住した韓国人もいたのである。

個人の軌跡から見える移民史があることは想像に難くなく、今回は縁あって1969年から1970年に飛行機で移住され、ブラジルで活躍されてきた柳敬烈さんや金沢吉男さんにも貴重な人生を紹介していただく機会に浴した。年配の韓国移民の話は、その個人の人生を聞かせてもらうだけで、日韓の歴史はもちろん、世界史までが見えてくるような、貴重な自叙さながらのものであった。

2010年、駐韓ブラジル大使館の大使に日系ブラジル人のエドゥムンド・ススム・フジタが就任した。日本ではなく韓国の大使に日系人がなったこと自体、新たな日韓関係をブラジルが切り開

く意味において、大きな希望を持たせるものである。

2014年のサッカーワールドカップ、続く2016年のリオデジャネイロオリンピックに向けて、リオ、サンパウロ、カンピーナスを結ぶ高速鉄道の敷設計画では、日本、韓国、フランスなどの高速鉄道が名乗りを上げ、水面下で政府間協議が進められている。日本は新幹線をブラジルが採用するという期待感を抱いているが、ブラジル社会での昨今の韓国の勢いを目の当たりにすると、新幹線のブラジル導入を信じ込むには尚早な気がする。

BRICsの一国としてブラジルに世界の耳目が集まる中、韓国のこの国への期待度も大きい。現在、韓国人全体の約15%が海外で生活していると推定されている。韓国から新天地を求めて海外に飛躍を試みる人はまず、ブラジルに出向くようである。そして、その地で世界の動向や情勢などを把握しながら、再び他国へ移住するケースもあると聞く。あべこべに、パラグアイやボリビアを経由してブラジルに入国するケースもあるようだ。

韓国からのブラジル移民は、今後数年先には、さらに2万～3万人増加すると予想する人もいる。もし仮にブラジルで高速鉄道コリアン・エクスプレス・トレン（KTX）の正式採用が決定すれば、移民の流入はそれ以上に拡大するかもしれない。

とまれ、本実態調査の多くは、現地サンパウロに住む大浦が、地の利を活かして実践した。田所は、他の民族集団との関連も視野に入れながら、ブラジル社会における日本移民と韓国移民との間の比較考察に主眼を置いて取り組んだ。

実態調査を推進するに際して、人種や国籍を超えて多くの方々にご協力を得た。わけても韓国老人会会長金沢吉男（金進卓）さま、柳敬烈さま、東亜日報の朴泰淳さまには、貴重なお話や助言をいただいた。末尾ながら、深甚の謝意を表します。

## 1. ブラジル韓国移民小史

### 1) ブラジルの第一回韓国移民

ブラジルでの公式の韓国移民は1963年に始まり、2010年で47年を閲する。ちなみに、ブラジルと韓国の外交関係が樹立されたのは1959年のことであった。朝鮮戦争（1950 - 53）の折には、ブラジルにもアメリカ合衆国から軍隊派遣の要請があり、ブラジル政府の間でも議論の焦点ともなっていたようだ。戦後の1962年、リオ・デ・ジャネイロにラテンアメリカでは最初となる韓国大使館<sup>1)</sup>が設置され、1965年にはソウルにもブラジル大使館が設置された。ブラジルへの第一回韓国移民を乗せたオランダ船TJITJALENGKA号<sup>2)</sup>は、1962年12月18日に釜山の港を出発した。当初、韓国の33家族がブラジルへ移民することを承認されていたが、17家族92人のみが日本にあるブラジル領事館から入国ビザを受け取り、結果的には89人と非公式の「グルッポ・ベルクルソル GRUPO PERCURSOR」と呼ばれる11人の旅行者がTJITJALENGKA号に乗船した。少し遅れて3人が飛行機でブラジルに到着した。

TJITJALENGKA号は釜山を出港した後、沖縄、香港、シンガポール、ペナン、モーリシャス、マブート（ロレンソマルケス）、ダーバン、ポート・デ・エリザベス、カーボ・デ・エスペランサ、リオ・デ・ジャネイロを寄港し、1963年2月12日に目的地のサントス港に到着した。決して快適とはいえない貨客船での56日、約2万kmの航海は、新天地での新しい生活への希望だけが心の支えとなっていた。船上ではポルトガル語教室やダンス、歌、スポーツなどに時間が費やされた。多くの移

民にとって、戦争で国土が荒廃し、南北分断されて生活環境はかんばしくない状況とはいえ、祖国を離れるのは断腸の思いであったことは言を待たない。

## 2) 入植が計画された初期の韓国移民

最初に到着した韓国移民は、内陸部に入植することが計画されていた。そのため、家を建てて耕作するための土地を購入する必要があるため、到着から一週間後には土地を探し求めた。このことは多くの日本人が移民した当初、ブラジルの農場主の下で働いたのとはいささか状況が異なる。加えて、韓国移民の多くは、韓国での農業経験がなかったのである。

1963年3月8日には5家族がサンパウロ市から約50km離れたグアラレマで38アルケールの土地を購入する契約が成立し、3月13日には現地入りした。当時、その場所はアリラン農場として知られたが、現在は存在していない。他の多くの家族は土地購入費を持ち合わせておらず、ボン・スセソール近郊の日本人が所有する農場を貸借して、1963年4月30日からソウル農場と呼ばれる場所に居住した。1964年には、新たに到着した韓国移民64家族がエスピーリト・サント州ヴィトーリアのポンテ・リンバ農場で土地を分割して入植した。

入植が実現しなかったケースも少なくなかった。1965年にはサンパウロ州イグアッペのイグアッペ農場を取得しようとしたが、書類や法律上の問題があるために事実上、不可能となった。他にもプロテスタント系の教会の後援により、マトグロッソ州にあるブリチ農場の取得が試みられたが、サンパウロから遠隔の地であったために実現しなかった。

1966年には、パラナー州のパラナグアア港から53家族313人が韓国カトリック教会の仲介でサンタ・マリア農場に向った。この農場は最初の成功例で、耕作地で仕事を習得し、町では鳥類(家禽)飼育業者として知られるようになり、組合も形成された。ただ、多くの韓国移民にとって農業のみでは生計の目途が立てられなかった。そのために彼らはサンパウロに移り住み、パン屋、タバコ屋、バールの経営、フェイランテ(野菜、果物、花などを露天市で販売)、既製服産業などの商売に転じることになる。この種の商売は今日でもあまり変わらない。韓国移民による既製服の製造・卸産業の先駆けとなった店はリベルダーデ地区の『世紀』だった。というのも、リベルダーデ地区は当時としては日本人街そのもので、多くの日本人が買い物で出入りし、日本語さえできれば商売が可能で繁盛もしていたからである。

新たに開店した韓国系の既製服店は、女性が家から家へと売り歩く訪問販売のシステムも採用し、売り歩く女性は「ベンデー」という名前で知られた。ベンデーはポルトガル語が堪能でなくても、服のみならず、韓国からの輸入品やカツラなども販売した。1980年代になると韓国系の既製服業者は、リベルダーデ広場に地下鉄が通って店が立ち退きになったことに加えて、将来へ向けて投資する意味で、以前から既製服の卸業者が集まっていたボン・ヘチーロ地区やプラス地区に順次移動するようになった。従って、ボン・ヘチーロ地区やプラス地区は現在、韓国系の人が多い。単に仕事場として韓国系移民が出入りするばかりか、2世や3世の時代を迎えて、かつてのリベルダーデ地区の日系人と同じように、街のあちこちで暮らす韓国系住民と出会うことができる。しかも、同じアジア出身ということで、日系人と韓国系の間の結婚も珍しい話ではない。

### 3) 戦前に日本人として移民した韓国移民第一号「ミタおじいさん」

第二次世界大戦前、韓国から日本に渡って居住し、日本人家族の養子となって日本移民としてブラジルに渡った韓国人にミタさんがいた。ミタさんは1928年9月20日にミタ・ショウゴの名前でサントスに到着し、公式のブラジル韓国移民の第一号と認められている。同じ時期に日本人の構成家族の一員としてブラジルに渡った韓国人はあと二人いた。戦前は朝鮮半島出身者が直接ブラジルに出向くことはできなかったため、稀なケースであった。

サンパウロではミタさんは米商人として知られ、自らの所有していたサンパウロ州アルジャー市の土地を韓国人協会に寄贈したりして、社会奉仕の活動が称えられ、1994年8月15日に功労賞を受賞している。

1970年に移民した金沢吉男さんは次のように回想する。「戦後、1963年から韓国移民が暮らしだすようになった時には、サンパウロのリベルダーデ地区に住むほとんどの韓国移民がミタさんに米を注文していました。70歳を過ぎてからも、若い従業員がいてもお客さんには数十キロの重い米袋を自らかついで届けていました。ミタおじいさんと呼ばれて皆から親しまれていました」ミタさんは90代で天に召され、現在は家族がサンパウロで暮らしているとのこと。

### 4) 戦後の公式移民の始まる前の移民

朝鮮戦争が休戦に入るころ、南北朝鮮を問わず、時の反政府勢力の一部の人が移民として南米に渡るケースもあった。多くは富裕層だったようだ。アメリカの支援などを通して、ブラジルには55人が渡り、内17人がアルゼンチンに渡ったと記録にはある。新しい韓国移民は、戦前に移民していたミタさんらによって迎えられた。リオに大使館が設置され、ブラジルの韓国移民が公式に始められるようになった背景には、先のこれらの韓国からの移住者の存在があったのである。

### 5) 日本移民との初期韓国移民の違い

ブラジルに渡った初期の日本移民の多くは、日本では農業に従事しながらも土地を所有することができない人で占められていた。その意味で彼らは、ゼロからの出発に等しかった。それに対して、第二次世界大戦後、特に初期に流入した韓国移民は、資金を有する韓国の富裕層が少なかつた。その点で、経験がないことから農業面ではけして成功を収めたとは言いがたかったが、持参した資金を元に経営者として事業を成就した者も現われた。

## 2. ブラジルの韓国移民の現在

### 1) 5万5千を越すブラジルの韓国系コミュニティ

2006年の時点でのブラジル連邦警察の調査に基づけば、約5万人の韓国人がブラジルに在住していた。それが2010年現在で、子供や孫の世代を含めて約5万6千人がブラジル各地、わけてもサンパウロに集住〔5万人〕していると推定されている。中でも、既製の縫製や販売を中心とした商売を営んでいるボン・ヘチーロ地区やプラス地区では、日本人と同じ東洋系の顔立ちをした、韓国からの移住者やその子孫たちでいっぱいである。韓国人ではないが、同じ地区で別の特徴のある顔立ちをした人をよく見かけるが、彼らの多くはボリビア人だ。ボリビアからサンパウロに移住してきた人たちで、ブラジル人と同様に韓国人に雇用されているケースが少なくない。





図1 韓国人による既製服産業が活発なサンパウロ市のボン・ヘチーロ地区とプラス地区、および東洋人街であるリベルダーデ地区。

約10年前のボン・ヘチーロ地区では、アシュケナジー（東欧系のユダヤ人）やアラブ系の人の、一昔前の装いの店舗が普通であったが、現在では古い建物をリフォームしたブティックが次々と出現している。と同時に、韓国系の新しい店舗も雨後の筈のように現われ、地区の装いを一新させている按配だ。加えて、いくつもの韓国食品店や韓国人向けの美味しい韓国料理レストランも数多く出現、食事時間帯ともなれば仲間とくつろぐ韓国人の姿がよく見かけられる。

ことほど左様に、とりわけボン・ヘチーロ地区にある韓国人街のここ10年間の急成長ぶりは、この10年来、ブラジルで大躍進を遂げてきた韓国の多国籍企業、サムスン・グループ、LGグループ、ヒュン

ダイ・グループなどの姿とも重なるものがある。サムスンやLGは、サンパウロの地元の人気チームであるサンパウロFC(LG)やパルメイラス(サムスン)のメインスポンサーであることも手伝い、その存在感は圧倒的とさえ言える。

ボン・ヘチーロ地区のその名の由来は、裕福なアラブ人の隠棲地であったことにあり、1862年にはサントスとジュンジャイ間を結ぶ鉄道の中心の駅であるルース駅が開通し、それ以降、イタリア人、ユダヤ人、ギリシャ人などが到来、今日の礎を築いた。現在は韓国人が加わり、地区にある1200以上の店の内、約840が韓国系といわれている。そして、韓国系を頂点とした社会層や雇用関係が現出する。その意味で、このボン・ヘチーロ地区は多様な民族集団が混住しているのみならず、民族の違いによってヒエラルキーが垣間見られる点で特筆すべきであろう。

ちなみに、婦人服の分野において韓国系企業はブラジル市場の30%以上を占めており、一日に約7万人が入り出るボン・ヘチーロ地区やプラス地区においては、直接的、間接的に約30万人の雇用を生み出しているという。

## 2) 韓国系の人々が集住するサンパウロの地区

先にも触れたが、サンパウロ市内で韓国系住人の主な集住地区は、ボン・ヘチーロ、プラス、リベルダーデ、アクリマソン、モルンビーなどである。

高級住宅街として知られるモルンビー地区は、単に移住者だけでなく、韓国企業の駐在員が増加している。その理由としては、居住地から企業の事務所に比較的に近いことや、子弟の通うアメリカンスクールやインターナショナルスクールが近在することなどが挙げられる。こうした韓国系住人の暮らす地域には、必ずといってよいほど韓国料理のレストランが存在する。

### 3) キリスト教系の信者の多い韓国移民

ブラジルに移住した韓国家族には、カトリック、プロテスタント、バチスタ、ペンテコステなど宗派は違ってもキリスト教徒が多い。

韓国系のカトリック教会であるサン・キム・ダイゲン教会は教区が設けられてから2010年で41年を迎え、サンパウロをはじめ、ポルト・アレグレ、クリチーバ、カンピーナス、ヴィトーリア、ベロ・オリゾンテなど、ブラジル全土で暮らす韓国移民の信者約4000人の心のより所となっている。同教会はブラジルのカトリック教会とも連携して、社会奉仕を通じて両国の絆を深める一方、韓国移民やその子弟がスムーズにブラジル社会に統合できることを意図して、積極的な活動を展開している。

プロテスタント系の教会も様々な活動を盛んに行っており、週末のボン・ヘチーロ地区の通りなどでは韓国からの伝道者が路上に立って、韓国語とポルトガル語で啓蒙活動をする姿も見かけられる。

キリスト教徒の信者の多さとは対照的に、韓国移民の仏教徒は減少の一途をたどっている。ブラジルにある大部分の仏教は日本移民の信仰を介してブラジルに伝えられた。韓国移民にとってもお馴染みのジン・ガク・サ Jin Gak Sa (브라질 진각사) はボン・ヘチーロ地区にある仏教寺院で、1983年にブラジルに拠点が築かれた。ブラジル人の信者も増える傾向にあり、現在は30人近い信者がいるようだ。

### 4) ブラジルで発行される韓国系の新聞など

サンパウロを拠点にブラジルで発行されている新聞には *Jornal Chosun*, *Diário Nammi Dong-A*, *Jornal HanKook Ilbo*, *Diário Joong-Ang*, *Jornal News Brasil* などがある。韓国の新聞社と提携しているところでは、韓国のニュースとブラジルの韓国系コミュニティの時事や話題が報道されている。中には、大部分が広告掲載の新聞も数紙あり、ブラジルでの韓国系の人たちの経済的繁栄をうかがわせるものがある。

サンパウロの *Diário Nammi Dong-A* 新聞社から2004年に刊行されたブラジルの韓国移民に関する著作『아마군의 꿈』(オー・ウン・ソク著) は、元韓国政府の官吏で第一回移民としてブラジルに渡り、*Diário Nammi Dong-A* の編集長なども歴任し、ブラジルの韓国移民の歩みを見つめてきたオー・ウン・ソク氏(86歳、2011年に逝去)の手になるものである。390ページに渡る詳細な内容はハングル文字による実録で、韓国の歴史研究者にとっても好個の文献となっている。

### 5) 韓国系移民に欠かせない韓国食材店

韓国からの食料輸入品も含めて、ブラジルで生産されるキムチなどの韓国食材を販売する店は、特にボン・ヘチー



写真1 ボン・ヘチーロ地区の一角にある韓国の食料品店。付近の通りにはユダヤ人なども行き来する。

ロ地区のトレス・リオス通りやブラテス通りに韓国料理レストランなどと軒を連ねている。リベルダーデ地区の東洋食料品店にも韓国製の麺類や菓子類などは販売されているが、ボン・ヘチーロ地区の食材店でしか見かけない韓国食材はあまたにのぼる。

ブラジルではなじみの薄い薄切りの牛肉や豚肉を専門に販売する肉屋もあることから、遠方からも韓国系の客が買い物に訪れる。ボン・ヘチーロ地区で古い韓国食料品店の一つである『OTSUGI』は20年近くサンパウロで営業している老舗である。顧客の大部分は韓国人であるが、ブラジル人客もおり、人気の商品は韓国製のラーメン、キンバブ（韓国のり巻き）、ジャブチェ（韓国の春雨料理）なのだそうだ。

#### 〔韓国からの輸入アイス「メローナ」〕

サンパウロでは今やアイスクリームの代表格となっているブランド「メローナ」は、韓国から直輸入されているアイスクリームである。韓国から製品をそのまま輸入するために、ブラジル産のアイスクリームと比べて割高であるが、ブラジルにはないアイスクリームの美味しさで、今やブラジル人にも人気のアイスクリームブランドになっている。東洋食品店をはじめ、人が多く集まるような飲食店やスーパーならどこでも見かける。ブラジルでサンパウロのアイスクリームについて尋ねれば、きまって「メローナ」という答えが返ってくる塩梅だ。

### 6) 韓国系コミュニティに注目される学校

ボン・ヘチーロ地区にある韓国系の学校「ポリロゴス」は1998年に開校され、ブラジルの法律基準に基づいた教育と合わせて、韓国語や韓国文化を提供する教育機関ということで、ブラジルに生活基盤を置く韓国系コミュニティの人々からは定評がある。母体は韓国教育協会で、韓国の教育を模範として質の高い教育を目指し、韓国人や非韓国系ブラジル人を問わずバイリンガルの教育を行っている。卒業生はブラジルの名門大学へも進学し、2009年に限ってみても、10人がサンパウロ大学に入学している。以下、いくつかのスポーツ活動に言及する。

#### ①サッカーを通じた交流

韓国はサムスンやLGがサンパウロのサッカークラブのスポンサーを通してブラジルでのサッカー交流を進める以外に、約20人のブラジル人サッカー選手が韓国のサッカークラブで活躍している。例えば、ブラジルのサッカークラブであるセアラやクルゼイロなどでプレーしていたジョアン・ソアレス・ダ・モタ・ネットは、2004年、韓国の全南ドラゴンズに移籍し、同年に14ゴールをあげKリーグ得点王に輝いた。その後、城南サッカークラブでプレーした後、2010年からは浦項スティーラーズに移籍している。

#### ②ブラジル生まれの女性ゴルファー

2004年のヴェージュ誌によると、サンパウロでは約1500人の韓国人がゴルフに親しんでいるという。今では日系ゴルフ場でも韓国人がプレーする姿が多く見られる。パラナー州生まれのアンジェラ・パク選手は韓国系二世の女性プロゴルファーとして、今日まで参加した大会で好成績を収めている。2009年には21歳でロレックス・ランキング（LPGA）で28位にランクインした。



### ③ テコンドー

今日、ブラジル全土でテコンドーをする人は30万人以上いるといわれる。テコンドーがブラジルに導入されたのは教育省の方針によるもので、1970年にサン・ミン・チョ（Sang Min Cho）師匠が招かれたのを契機に、サンパウロのリベルダーデ地区にブラジル初の道場が創設された。リベルダーデ・アカデミーは、現在サンパウロ州テコンドー連盟本部になっている。今日、ブラジルには師範が約1000人（サンパウロは約500人）いる中で、韓国人の師範は約40人というところ。テコンドーをポルトガル語で解説したDVDや本が出版されるほど人気は高い。

## 3. ブラジルと韓国との経済交流

### 1) 2000年以降に深化した双方の経済関係

ブラジルと韓国の通商が始まったのは1960年代のことだった。当初の主な取引品目はブラジルからは砂糖、米、薬品、織物、縫製機械、一方の韓国からは原料や海藻類、有機薬品などだった。1970年代には相互の経済関係はより緊密になり、韓国の輸入品目には動物飼料用の大豆、オレンジジュース、鉄、鋼鉄などが、ブラジルの輸入品目にはタイヤ、鉄、鋼鉄、織物、化学薬品、機械、金属が加わった。特筆すべきは、1976年には、韓国からブラジルに輸入された腕時計の売れ行きが最高潮に達したことだろう。

1980年代末から1990年代初めにかけて、両政府間で種々の協定が交わされ、双方の経済関係はさらに発展した。1991年には関税が軽減され、ブラジル市場での韓国系の経済が伸張する要因となった。

2001年から2008年までの韓国とブラジル間の輸出入額を見てみると、毎年右肩上がりである。2008年の韓国からブラジルへの輸出総額は60億ドルで、2001年と比べて267.79%も増額している。ブラジルから韓国への輸出額も同様の傾向が見られ、2008年には44億ドルと、2001年比で289.13%増額している状況だ。外交樹立から50年を過ぎ、特に2000年以降のブラジルと韓国の経済関係は、過去に例を見ない急成長を遂げている点は瞠目すべきだろう。

### 2) ブラジルに根付く韓国系企業

#### ① 世界各地で展開する韓国系コミュニティー間の交流促進

2002年には韓国政府主導の下、世界120ヶ国以上で活躍する韓国系企業の経済活動を促す目的で、同企業による世界協会が創設され、と同時に、世界会議も組織された。要するに、世界各地で展開する韓国系企業もしくは団体がメンバーで、グローバルな経済問題から環境問題に至るまで議論され、新しいビジネスチャンスも模索しようというものである。

韓国の本部では20人の評議員が2年ごとに選出され、世界6地域（アジア、北米、ラテンアメリカ、オセアニア、ヨーロッパ、アフリカ）にそれぞれの連合団体が存在する。2009年時点でのラテンアメリカの代表は、ブラジルの現地に根付いた韓国系コミュニティーから選出されている。

ブラジルの韓国系企業をまとめる役のブラジル韓国商工会議所は1983年に創設された。サンパウロ中心に約2500の企業や個人が加入している。この商工会議所はいわば、経済交流ばかりか、ブラジルにおけるビジネス面での物流管理などを後援する機関ともなっている。

## ②存在感を強める韓国系企業

ヒュンダイ、サムスン、LG、GM 大宇 (Daewoo)、キア・モーター、アジア・モーターなど韓国系企業は、家電、電子機器、自動車などの分野でヨーロッパや日本のブランドを圧倒する勢いで、ブラジルでは大きな存在感となっている。

韓国系企業は、主に 1990 年代中頃からブラジルで経済活動を本格化させ、同国の科学技術発展にも寄与し、さらなる近代化を促した。サッカーやゴルフのみならず、オリンピックの選手のスポンサーとして知名度の高いいくつかの代表的な韓国系企業の、ブラジルでの歩みを中心に以下に簡単に記すことにする。

### a) 【LG グループ】

1947 年に創業した LG グループは、1995 年からブラジル市場に参入した。現在、アマゾーナス州マナウスとサンパウロ州タウバテの 2 カ所に工場がある。ブラジル全体で約 5 千人の従業員がおり、テレビ、ビデオ、オーディオ、エアコン、携帯ほか、家庭用電化製品などでブラジル市場の大きなシェアを占めている。現在、ホームシアター、液晶モニター、プラズマテレビ、液晶テレビの売り上げランキングでもブラジル市場の首位にある。

スポーツ関係への投資も積極的に行い、2001 年からサンパウロ FC のスポンサーである以外に、ゴルフのアンジェラ・パク選手のスポンサーとしても知られた存在である。

### b) 【ヒュンダイ (現代) グループ】

1946 年に創業されたヒュンダイ・グループは、サンパウロ州ピラシカーバに組立工場が建設された 1999 年以降、ブラジルのカオア・グループと業務提携してブラジルの自動車産業界では大きな注目を集めている。かつては品質の悪さがピアダ [笑い話] にされることもあったというヒュンダイの自動車が、今日では高い品質と洗練されたデザインに裏打ちされて、ブラジルの町中を走行する車として一大ブランドにまでなった。

### c) 【サムスン (三星) グループ】

1936 年に創業された韓国的一大財閥であるサムスン・グループは、情報テクノロジーの分野で世界に大きな影響を及ぼしている。ブラジルに拠点を置いたのは 1986 年で、その後、同業社と協調して本格的なビジネスを展開しつつある。マナウスの工場ではテレビも生産している。サンパウロのサッカークラブ、パルメイラスのスポンサーのほか、体操選手のダイアナ・デ・サントス、女子サッカー選手のマルタ、男子バレーボール選手のジバなど、ブラジルのオリンピック選手のスポンサーとしても知られた存在だ。

### d) 【ア・キア (起亜)・モーター・コーポレーション】

ア・キア・モーター・コーポレーションは 1944 年に創業され、当初は自転車部品の生産が主だった。今日は世界のカーレースで大きな存在感を示している。世界 8 カ国で 14 の工場を操業させ、年間、約 140 万台の自動車を生産、172 カ国で販売している。ブラジルには、1992 年にサンパウロ州イトゥー近郊で設置された韓国のキア・モーター・コーポレーションの組立製造工場があるほか、エスピーリト・サント州のヴィトóriaが、韓国からの輸入車を受け容れる拠点となって



写真2 LGグループがメインスポンサーであるサンパウロFCとサムスン・グループがメインスポンサーであるパルメイラスのサッカーのユニフォーム

いる。現在はヒュンダイ・グループの傘下であり、「ヒュンダイ・キア・グループ」を形成する。  
他方、全豪オープンテニスのメインスポンサーであり、2014年のサッカーワールド杯ブラジル大会の開催におけるオフィシャルパートナーにもなっている。

### ③韓国企業の躍進に関わる人材登用について

韓国系企業の世界での躍進の要因の一つには、例えば、アメリカ合衆国やブラジルで育った韓国人子弟の教育に力を注ぎ、しかも、現地のトップクラスの大学で優秀な成績を収めた者を韓国で採用することにあるようだ。のみならず、国籍を問わず、各国で優秀な学生であれば韓国企業に採用するという、グローバルな人材登用や戦略が奏功している。

## 4. 異文化の挟間に生きたある韓国移民（男性）の話

### 1) 柳敬烈さん

#### ①日本人として教育を受けた時代

柳敬烈さんは1931年に韓国のソウルで生まれた。それは日本統治下でソウルが京城（けいじょう）と呼ばれた時代だった。柳さんの子供時代、韓国の尋常小学校（国民学校初等科）は、韓国人と日本人はそれぞれ別の学校に通っていた。ご多分に漏れず、柳さんも韓国人の通う尋常小学校に通った。第二次世界大戦の足音が忍び寄る中、小学校で使用されていた韓国語が、1938年には使用禁止となった。

柳さんは、子供時代、言葉も考え方も日本の教育を受け、韓国の歴史や言葉の教育を受けることはなかったが、それが全く違和感なく当たり前のこととして疑ったことはなかったらしい。そして、「私は生まれた時から日本だった朝鮮で日本語や日本の考え方で教育を受けたため、苦しい



写真3 柳敬烈さん

とかその事自体に疑問を感じたことは一度もなかった。日本人と同じだという意識を持っていた。ただ、私の祖父母の世代などには自らが日本語や日本文化になじめないこと、孫たちに韓国の歴史や文化を教え伝えられないことはとてもつらいものだった」と、当時の事を振り返る。(この言葉を聞くと、ブラジルの日本移民が孫世代にもなると日本語や日本文化も通じなくなって、ブラジル人になってしまうことにえもいわれぬ一抹の寂しさを感じることにいささか似通っている。)

小学生時代の韓国人にとって、ひらがなとカタカナは簡単でも漢字の壁にぶつかることが少なくなかった。しかも、旧制中学校に入学するためには試験に合格しなければならず、その意味で日本語ができることは必須条件であった。旧制中学からは日本人と韓国人は同じクラスで学べたが、50人のクラスに韓国人はわずか7、8人在籍するのが一般的だったという。柳さんは難

しい試験に合格し、旧制中学に入学した。しかし、間もなく日本が敗戦となり、旧制中学一年生の時に「日本人」から「韓国人」となった。

## ②韓国での社会人生活

第二次世界大戦の終焉を機に、柳さんは初めて自らが韓国人であるとはっきりと自覚したという。それまで教えられてこなかった韓国の歴史があることを知り、家でも外でも韓国語で会話し、ハングル語を読み書きするようになった。強いと思っていた大日本帝国が朝鮮から引き上げると、日本と同様、アメリカ合衆国が韓国にも進駐し、飴やチョコレートを配った。そして、アメリカ合衆国は軍隊だけでなくキリスト教（プロテスタント）文化をももたらしたのだ。柳さんはキリスト教に興味を持ち、英語を勉強し、大学に進学する前に2年間神学校で学んだ。大学4年間は法律を勉強し、一般の社会人として働こうと思った矢先に朝鮮戦争が勃発、アメリカ軍に入隊して2年間軍隊での生活を送ったのであった。

軍隊生活を終え、社会人として生計を立てるために25歳の柳さんが得た職業は、絹織物工場の社長だった。戦前に日本の会社が朝鮮半島に持ち込み、引き上げと同時に残された紡績機を買取り、日本やアメリカから輸入した合成の絹糸を使用した生地を織り、国内外に販売した。それ故に、最盛期にはおよそ400人を数える従業員が工場で働き、時代に後押しされて商売の方は繁盛するのであった。

## ③韓国初の飛行機での移民としてブラジルに渡る

韓国で成功を取っていた柳さんに転機が訪れたのは39歳の時だった。商売は軌道に乗っていたが、5人の子どもに対してより良い教育を身につけさせるため、また、親族間にあったトラブルを避けたいという思いもあってブラジルへ渡る決意を固めた。そして、奥さんと1男4女の家族7人で、韓国から初めての飛行機を使った移民としてブラジルに到着したのである。



ブラジルに来るまでは、ブラジルとアメリカ合衆国は同じような国だと思っていた。英語を話し、世界最先端の技術を持つ洗練された都市文化のように想像していたブラジルは、言葉も違えば、通りにはコーヒー袋を服にして裸足で歩いている子供たちがいることに大きなカルチャーショックを受けた。奥さんは「どうしてこんな所にいなければいけないのか」と、移民当初は夜な夜な泣くこともあったという。

ブラジルで心機一転して新たな生活をスタートするために、約1年半は手始めにサンパウロ市のセントロ地区でフルーツ販売を試みた。その後、既に仲間の韓国移民たちが携わっていた服の縫製と販売を1970年から約25年間に亘って行った。

移民当初、学齢期にあった子どもたちにポルトガル語を勉強させるため、まずはブラジルの小学校一年生から勉強し直させ、結果として、飛び級で学年も上がり、難関のサンパウロ大学などを卒業させた。家業を継ぐ子供や農場を経営する子供、孫まで含めて7人で移民してきたのが今や30人の大家族となっている。

〔退職後の仲間の韓国移民とともに〕

80歳を迎え、仕事の第一線から距離をおいた柳さんは、2006年にボン・ヘチーロ地区のビルで部屋を借り、仕事をリタイヤした韓国移民が集える老人クラブを設けた。以前は数人が集まって付近のバールに集まっていたが、落ち着かないということで、一室を借りることにした。

2010年現在、老人クラブの会員は53人いる。皆で一緒に昼食を食べ、韓国将棋（チャンギ）に興じる韓国移民の姿が印象深い。

#### ④世界の中でブラジルはとても住み良い国

かつては3ヶ月に一度のペースで世界各国を旅して各地の見聞を深めてきた柳さんは、「ブラジルは世界でもとても住み良い国」と確信している。かつて一緒にブラジルに渡った韓国移民の中にはアメリカ合衆国などへ再移住する者もいたが、結果的にアメリカ合衆国に渡った仲間たちは社会背景の違いもあり、アメリカでは成功することは難しかったと聞いている。ブラジルは将来性もあり、食べ物もおいしく、今ではブラジルに移民してきたことを心から良かったと思っている。」と述懐する。

世界列強の欲望が渦巻く戦争が行われていた時代、韓国人家庭に生まれ、子供の頃は日本文化、青年期にはアメリカ文化、そしてブラジル文化の中で人生の半分以上を生きてきた柳さんが思うことの一つは、「我々は平和のために一生懸命働き、食べて生きていく」ということである。柳さんの温厚な笑顔と親しみやすい人柄から、真の国際人とは何かという答えを見出せる思いがする。

## 2) 金沢吉男さん

### ①戦時下の日本で生まれ育つ

金沢吉男（韓国名は金進卓）さんは1931年、日本の大阪で韓国人家庭の下に生まれた。尋常小学校（国民学校初等科）4年の時、大東亜戦争の戦火を逃れるために山口県柳井市の上馬皿（かみばさら）に疎開した。金沢さんの心の故郷は今でも、少年時代に友達と野球などをして過ごした上馬皿であると語る。



写真4 金沢吉男（金進卓）さん（中央）とブラジル韓国老人会の仲間たち

旧制中学に進学して2、3ヵ月が経つ頃、第二次世界大戦の戦火が深まる中で、山口県光市の光海軍工廠（ひかりかいぐんこうしょう）で学徒動員された。海軍工廠で仕事をしている最中の1945年8月14日、空襲により多くの犠牲者が出て施設は壊滅し、近くを流れる川の水が飛んでいった光景が忘れられない、と言う。そして翌日、広島に原爆が投下されたのである。

## ②韓国、ベトナム、そしてブラジルへ

勝つと信じていた日本が敗戦し、韓国の蔚山（ウルサン）出身の母の希望もあり家族全員で父の故郷である釜山に移った。日本で勉強していたこともあって韓国語をあまり勉強できなかった金沢さんは、韓国語を改めて勉強し、二年遅れで韓国の高校（旧制中学）に通い始めるのであった。

高校卒業を目前にした1950年6月25日、今度は朝鮮戦争が始まり、韓国軍で約4年間働いた。その間、二度の爆撃を受け、一度は耳に直撃し、片耳の聴力を失った。朝鮮戦争が休戦すると、工業学校で電気の勉強をして電気技師となり、ソウルの飛行場で働いた。しかし、戦争で荒廃した国土は経済も破綻状態で家族を養っていくのも大変だったため、1964年からはアメリカの軍属としてベトナムに渡り電気技師として働く道を選んだ。1970年に母国に戻り新たな就職先を探したが、40代を目前にして小さな子供たちを養っていくだけの良い再就職先はみつからず、心機一転して海外渡航を決意する。

当初はアメリカ合衆国に渡ろうとしたが、ビザを取得するのが難しく、ブラジルに移民することになった。3人の友人たちと妻、8歳の長男と6歳の長女を連れてのブラジル移住だった。飛行機で渡航することになったため、当時の渡航費は家族4人分で韓国の家一件分にも相当した。

1970年、ブラジルに到着した当時はまだ韓国移民は少数で、アクリマソン地区の近隣に居を設けた。今日に至るまでの40～50人の韓国人の飲み友達、昔からの顔なじみであるという。一緒に渡航した2人の友人はブラジルからさらにアメリカに移ったが、金沢さんの場合は、ブラジルで知人に全財産に近い額を騙し取られアメリカ行きは断念せざるを得なくなったようだ。

## ③日本人街で始めた商売

ブラジルに渡り、当初は腕に覚えのある電気関係の仕事を探したが就職口は見つからず、リベ

ルダーデ地区のリベルダーデ広場の店舗を借りて、婦人服や雑貨の販売を始めた。当時のそこは日本人街で、日本語が出来れば仕事のできたので、日系2世を従業員として一緒に働いたそうだ。日本移民とも親交があり、今日まで続くリベルダーデ商工会の創設メンバーの一人でもあった。

約3年間、奥さんとともに一生懸命に働き商売も繁盛していたが、地下鉄が通ることになり立ち退きとなった。そこで、プラス地区に移って商売を続けることになる。このプラス地区には先住のアラブ人を中心に既製の卸業者がおり、同業でありながら日本的な考え方で仕事を進めていた金沢さんは、幾度となく購入費が未払いのまま回収できないなどの憂き目にもあったと言う。それでも韓国人の仲間とともに信用を得て、プラスでの商売は軌道に乗った。

#### ④ 65年ぶりに小学校時代の思い出の地へ

命がけの波乱万丈の人生を送ってきたが、今では子どもたちもブラジルの大学を卒業して、ブラジルで根を張って生活し、孫にも恵まれ、サンパウロ市内の高級住宅街で穏やかな日々を送っている。日本で生まれ、家族と生きるために韓国、ベトナム、ブラジルと地球を渡り歩いてきた金沢さんにとって、一番の心の故郷は今も日本であるという。「学校の休み時間に野球をして友達と遊びたいのに、弁当を食べるのが遅い女の子がいてなかなか休み時間が始まらないので、みんなで早く食べるように意地悪を言って先生に叱られた」と微笑みながら少年時代の思い出を語ってくれた。

ブラジルに生活しながら、これまでも何度も日本や韓国を旅行している。2010年には65年ぶりに上馬皿を訪ね、地域の人々に親切にされたのが一つの心温まる思い出となったようだ。日本では旧友を訪ねたが、多くが天に召し、会えなくなってしまったとのこと。やるだけのことをやって生きてきた金沢さんは、「後は死を迎えるだけ」と穏やかに話す。今の楽しみの一つは演歌のCDを聴くことだそうだ。

## おわりに

第二次世界大戦後に公式に始まったブラジルへの韓国移民は、日本語を話す世代の移住史から始まっている。韓国に縁のある柳さんと金沢さんにお話をうかがい、異文化や国際化社会で生きるとは何かということ、お二人の空気から改めて思い知らされたような気がした。国際的に生き、もっといえば国際的に生きざるを得なかったともいえるお二人の人生には、グローバル社会で生きるヒントが多分につまっているように思う。そして、グローバル社会の究極の私たちの目的は、人類愛ということに尽きるかもしれない。「心の故郷は小学校の時の楽しかった思い出がたくさんある日本」という金沢さんの言葉がすこぶる印象深かった。このことは、ブラジルで生まれ育った日系ブラジル人の人生にも置き換えられる言葉のように思える。日本に係累がありながら、日系ブラジル人であれば、「心の故郷はブラジルだ」となるかもしれない。

柳さんや金沢さんは韓国というナショナルアイデンティティーがある一方で、日本文化と身近に接した過去を持ち、後半生はブラジルで生活したのである。国や文化は違っても、同じような人生を辿った人は、日本人の80代前後以上の世代に少なからず見ることができよう。

日本人として第二次世界大戦前に、朝鮮や台湾、満州で育った人々の故郷を思うと、当時は日本とされた土地であっても、実情は異文化の人々と共生する子ども時代を過ごしたはずである。

80歳前後の日本人でありながら外地で子供時代を過ごし、14、5歳ぐらいで引き上げることになった人たちは、心の故郷は朝鮮や台湾、満州ということにならないだろうか。

敗戦を迎えるまで日本人であった朝鮮や台湾人が、突然、朝鮮人や台湾人、中国人といわれてアイデンティティーについて考えさせられ、戸惑ったように、外地で育った日本人も突然故郷が異国になり、日増しに育った環境の中で日本への思いが消えていったわけである。故郷を奪われたようなものだ、というのは当時を知らない個人的な思い込みだろうか。戦前の外地生まれの日本人移住者がブラジルで決して少なくないのは、偶然のことではなく、自然な心に従っただけのことのようにも思う。

国境や国籍とは、実に人工的な産物であることを歴史や人の人生が証明してくれている。

日本の80代前後の世代は、容易に海外旅行ができるようになった今の日本の若い世代よりも国際性のある世代だったと言えるのではないか。しかも、そうした年配者が戦後日本をリードしてきた点は否めない事実である。

概して、日本の若い世代は内向きで海外志向が低調なのが話題になっている。これとはあべこべに、韓国や中国、東南アジアの若者たちの海外志向が際立つ。近年のブラジルにおける韓国や中国の躍進ぶりと較べてみると、そのニュースを裏付けるかのように、日本が停滞気味か低調である空気を、国際都市サンパウロに暮らす多くの日本人も感じ取っている。その空気の本質は、若い世代のエネルギー不足と言い換えることもできるような気がする。物質的に恵まれた国で育った必然の結果ともいえるかもしれないが、根本的な原因をそこに求めてはいけないうと思う。

世界を比較する見識に長けた方から、以下のような言葉を聞いた。「日本は個人の能力は低い。中国や韓国は個人の能力は高い。」確かに、語学にしても然りである。中国人が流暢に日本語や英語を使いこなすのと比べて、どれだけの日本人が中国語や英語を自由自在に操れるだろうか。この現実には日本の地理的状況や日本語の特殊性から見て大きく変えることはできず、素直に受け止めるしかないようにも思う。ただ、救いがないわけでない。「日本人の長所は、集団で結束するとグローバル社会でも負けない強い力を発揮する。中国や韓国は集団になると結束力がなく、弱い」とも言う。

近年、個人主義がともすれば風潮となっている日本社会で、忘れがちだった本来の日本人の特性が集団での結束力だろう。この長所を今一度見直すことは、日本という国がある限り、新たな国際社会でチャレンジするために必要なことではないだろうか。

ともあれ、これまでのブラジルの韓国移民社会に関する実態調査を通じて、同国における日本と韓国のコミュニティ形成の有り様や、そこに投影された国民性、文化の特殊性などがある程度浮き彫りにすることができた。ブラジルの韓国移民社会に関する考察は依然、初期の段階に留まっており、さらなる研究の深化が求められる。今後は研究対象地域を単にサンパウロに限定せずブラジル全土に拡げ、韓国移民の社会相に焦点を絞り、社会成員としてのあり方、他の民族との交流等についても認識を深めたい。この作業を通じて、ブラジルにおける日本移民と韓国移民との間の社会的性格や文化性などの相違も明らかにされるに違いない。今後の課題としたい。



## 注

- 1) 1960年に首都はブラジリアへ移るが、大使館はリオにしばらく置かれた。
- 2) 元JCJL〔Java-China-Japan Line社(蘭)〕の貨客船。日本人移民の他、釜山にも寄港し韓国人移民も輸送した。

## 参考文献

Basto, Fernando L. B.

s. d. *Síntese da História da Imigração no Brasil*. s.e., Rio de Janeiro.

Associação Brasileira dos Coreanos

2008 *45 anos de Imigração Coréia Brasil*. São Paulo, São Paulo.

Dong Soo Park

2009 *50 anos de Relações Diplomáticas Brasil e Coréia*. Associação Brasileira dos Coreanos, São Paulo.

朝倉美江

2011 「韓国の多文化家族政策の現状と課題」, 『文化連情報』, 6月号, No.399。

オー・ウン・ソク

2004 *Diário Nammi Dong-A*, São Paulo.

川村・金・守屋

2010 (「ブラジルの日系および韓国系移民の文学の総合的研究」研究班) 共著, 『2010年度調査旅行報告集』, 法政大学国際文化学部「アジア太平洋におけるディアスポラの研究」研究会。

水野俊平(著)／李景珉(監修)

2008 『韓国の歴史』, 河出書房新社。

